

教育講演1

乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)における頭部外傷メカニズム ～転倒・転落事故による頭部外傷とのメカニズムの違いとは～

宮崎祐介(東京工業大学 大学院 情報理工学研究科 情報環境学専攻)

【抄録】

乳幼児揺さぶられ症候群の主徴として、急性硬膜下血腫と一次性脳実質損傷が挙げられる。一方で、乳幼児期の転倒・転落事故における急性硬膜下血腫も報告されており、乳幼児頭部外傷の虐待と事故の鑑別は難しい。適切な鑑別を行ううえで、これら病態の力学的なメカニズムを明らかにすることが必要であるが、そのメカニズムは不明であり、長年の論争の的であった。近年、乳幼児頭部の形状や力学的な特性を模擬した力学モデルにより、暴力的揺さぶりおよび転倒・転落事故における頭蓋内での脳の挙動とそのメカニズムが明らかになりつつある。本講演では、なぜ暴力的揺さぶりにより重症頭部外傷が発生しうるのか、日常的なあやし行為との違いは何か、転倒、転落事故とのメカニズムの違いは何かについて力学的な視点から説明する。

教育講演2

子育て支援の意義を確認する～子ども虐待といやされない傷～

友田明美(福井大学 子どものこころの発達研究センター)

【抄録】

“児童虐待”は日本の少子化社会の中で、子育てや教育の現場、マスコミの現場、また医療の現場でますますクローズアップされている。児童虐待には殴る、蹴るといった身体的虐待だけでなく、性的虐待、暴言による虐待、不適切な養育環境、家庭内暴力(DV)を目撃させることなど心理的虐待も含まれる。また幼児期や児童期の虐待で受けた身体的な傷がたとえ治ったとしても、発達過程の“こころ”に負った傷は簡単にはいやされないことがこれまでの研究でわかってきた。子どものときに激しい虐待を受けると、脳の一部がうまく発達できなくなってしまう。そういった脳の傷を負ってしまった子どもたちは大人になってからも精神的なトラブルで悲惨な人生を背負うことになる。被虐待児の脳がいかにか傷ついていくのか、ヒトの“こころ”の摩訶不思議な脳神経科学的な働きについて米国ハーバード大学精神科との共同研究で明らかになってきたことを、虐待と脳発達の感受性期との関係も含めてご紹介したい。

ランチオンセミナー1

児童虐待の画像診断 ～Part 1 総論と骨損傷について～

小熊栄二(埼玉県立小児医療センター 放射線科)

【抄録】

虐待への医療機関の取り組みは、当然ながら子どもの安全の確保と支援が目的である。“犯人捜し”は医療機関の本来の役割ではなく、その権限も与えられていない。医療機関は虐待に対しても、医療機関としての機能をまず十分に果たすべきである。すなわち他の傷病と同様に子どもを病因(加害者)から遠ざけ、しっかりと情報を収集して記録に残す、確実に疾患を鑑別し虐待を忘れない。虐待の見逃しは他の致命的疾患の見逃しと同様に不幸な転帰を辿ることさえある。

初期対応で確定診断の必要はないが、被害児の体に何が生じたかを確実に記録に残すために、もれのない系統的な画像診断の実施が必要である。頭蓋内損傷を評価するための頭部 CT と MR、骨損傷を評価するための全身骨撮影は必須であり、虐待の判断に有力な材料となる肋骨骨折は胸部 CT で評価するのが望ましい。

医療機関が虐待に対応するにはCPTを中心としたチーム医療が必要であり、なかでも児相や地域との架け橋となるSWの活力がカギになる。画像診断による正確な情報の把握は、チームの判断を統一し、子どもの保護に向けた活動の推進力となる。

ランチオンセミナー2

児童虐待の画像診断

～Part 2 画像診断から見た Abusive Head Trauma (AHT)～

相田典子(神奈川県立こども医療センター放射線科)

【抄録】

ある英文教科書では被虐待児の2/3は放射線学的に有所見と書かれており、正確な病歴を得ることが不可能な小児虐待の診断における客観的な画像診断の意義は大きい。活動性の低い年少児が保護責任者の目の届く家庭内の事故で重症となることは少ない。AHTで最も頻度が高いのは硬膜下血腫(SDH)である。乳幼児のSDHのうち交通事故を含めた不慮の事故によるものは約10%に過ぎないとされ、大半は虐待、特に暴力的な揺さぶりによって発生していると考えられており、半球間裂部、大脳鎌、テントに沿ったSDH、後頭蓋窩SDHは虐待との関連性が高いとされる。脳実質損傷の頻度も高く挫傷、皮質白質境界に好発する裂傷、低酸素性虚血性脳症等と二次的な脳浮腫がある。我が国では軽症でもCT/MRI検査をされることが多く、偶然SDHなどを発見することが稀でなくあり、そういう場合に虐待の可能性を念頭に診療にあたるのが、虐待－被虐待の連鎖の中にいる子どもを助け出す事につながる。

特別講演

必死のパッチ！で乗り越えて・・・

桂 雀々(落語家)

【略歴】

1960年大阪市住吉区生まれ。

1917年6月に師匠 桂 枝雀の下へ入門。

その風貌と師匠譲りの爆笑落語で人気を博し

テレビ・ラジオのみならず、舞台・映画でも活躍。

南住吉小学校・三稜中学校と15歳まで住吉区で過ごすも、

両親から育児放棄を受け

民生委員や地域の方々からの支援によって

中学校時代を過ごした経験を持つ。

2008年にその当時の内容を記した自叙伝

「必死のパッチ」(幻冬舎文庫)を刊行。

大きな話題を呼び、今年映画化が決定。

2011年より活動の拠点を東京へ移し、

50歳を超えてなお前進し続ける平成の爆笑王。